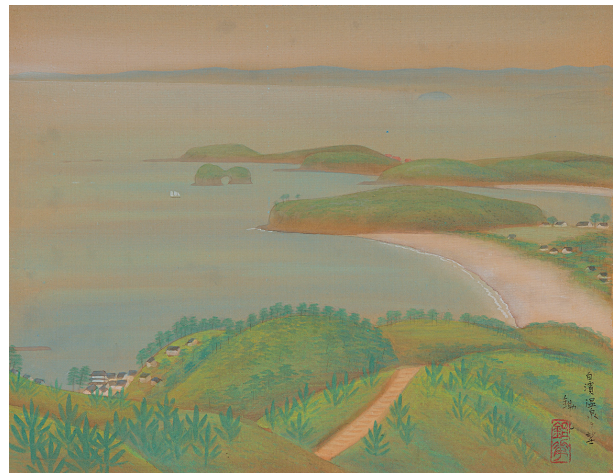


廣島鋤花《紀南百景》より

1927(昭和2)～31(昭和6)年頃 和歌山県立近代美術館蔵



動鳴溪



白濱温泉ヲ望



鮎川温泉

今からおよそ90年前、廣島鋤花は和歌山県の北部から、南部の田辺や新宮、三重県の鬼ヶ城に至るまでの広大な地域を、幾度も旅行して写生を重ねました。まだ整備されていなかった当時の険しい道を、主に自転車であぐり、眼前の光景を描き留めていったこの行程は、和歌山の豊かな自然を全身で感受しながらのものだったと想像されます。このときのスケッチを元に描かれたのが《紀南百景》です。

複数の《紀南百景》が制作されたことが記録から確認できますが、ここに紹介するのは、鋤花が京都で師事していた西山翠嶂の画塾、青甲社の展覧会に出品されたものです。4冊の画帖に収められたうちの3点で、いずれも田辺、白浜の風景を描いたものです。

絵画と出会う「この一点!」

文人画にみる心象風景

会場：田辺市立美術館

会期：2019年10月12日(土)～11月24日(日)

江戸時代の文人画家たちが風景画を描く上で目指した到達点は、「写意」を込めた実景の図、すなわち「真景図」を描くことでした。数多くの画人たちが持てる技法や手法をこらして作品を描きますが、なかでも先人の模倣に重点をおきつつ、それを更に昇華させることに心を砕いたのが野呂介石(1747～1828)でした。

本図は三幅を通して図様が連続する山水図で、一幅でも数幅合わせても鑑賞できることから「離合」と呼ばれます。生前の介石の言葉を弟子がまとめた『介石画話』などには、伊勢の松坂(現在の三重県松阪市)を公務で訪れた際、中国清代に活躍した伊孚九の代表作「離合山水図」を見て感銘を受けた介石が、自らも同じ三幅対の離合山水図を描いたことが記されています。

本図はその作例の一つとみられ、伊孚九の図様に似せてはいるものの単なる模写ではなく、自身がこれまでの研究で得た「山水の描き方」を出来るだけ反映させようとしたことがうかがえる内容となっています。

(主任 辰巳 充)



野呂介石「離合山水図」一八五二文化二年

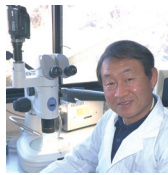
田辺市立美術館蔵

田辺市立美術館へのきもち②

田辺市立美術館近傍の南紀の台の住民となって27年が経過した。住み始めた頃はこの辺りは別荘ばかりだったが、最近は宅地の造成が進み、津波を避けるためもあってか、住人も増えた。この閑静な高台から田辺市立美術館へと巡る散策路がある。小山と谷が次々と交互する山野辺の小道に分け入ると、野生の虫、鳥、草木等の姿や声が四季折々鑑賞できる。ここで、20年前に南紀熊野体験博が盛大に開催され、その後も新庄総合公園として整備されてきた。その中であって田辺市立美術館はずっと目玉のままである。美術館の周辺には園芸種が色とりどりに独特の姿で咲き誇る花壇があり、心も和む。私はこの様な自然と人工が織りなす公園で出逢った虫やナメクジや草花等についての数々の記録を各種雑誌で紹介している。今楽しみにして見守っているのは、公園内の池にマミズクラゲが湧き出てこないかという事である。毎日、公園内を巡る散策路で美術館の傍を通りながら、憩の一時を過ごしている。



クラゲの壁画が描かれている研究所の外観と筆者



私はクラゲの系統分類学の専門家で、昨年までは白浜町に所在する京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所に教員として勤務していた。そこでは水族館を併設していることもあって、多様な海洋生物の研究と教育に勤しんできた。定年退職後は、現在地球上に生きている動物の中で超ウルトラ能力を発揮する、つまり「若返り」を繰り返し起こす、ベニクラゲに関する研究と体験ができる個人研究所を設立した。ここでは、クラゲをスケッチし、対象をよりよく見て知る事から体験研究を始めていただくようになっている。生き物には独特の形態がある。それを会得していただく事で、その生物を知り、親しみを覚え、地球上の全ての命を大切に心が芽生え、多様で平和な生命の星を尊ぶ気持ちりが育まれたら幸いと思っている。そして、人類の夢がかかった「若返り」の秘密の解明と応用を究極の目標としている。

この様に自然散策と生物研究が専らの私だが、美術館巡りも人生の重要なひとこまになっている。音楽や映画等もさることながら、何と言っても美術館こそ人の芸術活動を心から鑑賞できるまたとない空間である。田辺市立美術館はいつも空調が適切に効いて居心地良く、ゆったり配置された様々な美術品を心ゆくまで眺められる、まさに幸せの一時…。また、田辺市立美術館では多様な企画展が次々と催されるのも嬉しい。特に自然がテーマになったこれまでの展覧会は、全て有意義に鑑賞させていただいた。先般は「描かれた滝」展が世界遺産登録15周年記念として開催されていた。紀南に多く存在する滝を自身で訪れたときに感じたその場の雰囲気と、美術作品となった両者と自分なりに比較するのは格別の楽しみであった。写真では現せない絵画の表現はなんととも素晴らしい。今後多角的な企画を心から楽しみにしている。

(ベニクラゲ再生生物学体験研究所所長 久保田 信)

編集後記

世界遺産登録15周年記念の小松正史さんのコンサートには多くの方々のご来場をいただきありがとうございました。私も素敵な時間を頂きました。10月には新庄公園でコスモスまつりが開かれ、11月には恒例となった「関西文化の日」にあわせての観覧料無料と展示解説会を行います。この秋以降も引き続き皆様のご来館をお待ちいたします。(F.O.)

田辺市立美術館NEWS

ORANGE

Vol.31



鍋井克之《円月島(紀州白浜温泉)》1933(昭和8)年

田辺市立美術館蔵

作品介绍 鍋井克之《円月島(紀州白浜温泉)》

鍋井克之(1888～1969)は生涯にわたって風景画の制作を主とし、油彩画による日本の風景の表現を追求した代表的な画家である。鍋井は現地での制作を徹底し、モチーフを求めて全国各地へおもむいたが、特に好んで描いた風景のひとつが、紀伊半島南部の沿岸部だった。しかし当地を描くようになったのは、けて早くからではなく、鍋井が40歳代の半ばになってからのことである。それまでの鍋井の海景は主に北陸地方の日本海沿岸に取材したものであった。鍋井は随筆の中で白浜に来た当初のことを「汽車は田辺駅迄で、それからは一時間ほどバスに依らなければならなかった」と記している。田辺駅の開業は1932(昭和7)年の11月で、翌年の12月には白浜まで線路が開通しているため、鍋井が当地を訪れた最初は、およそこの一年の間とみてよいだろう。《円月島(紀州白浜温泉)》の裏面には、鍋井の署名、題名とともに「昭和八年一月」と記されていて、この作品が鍋井の白浜訪問最初期のものであることがうかがえる。鍋井は同じ随筆の中で「初めはこの地方の明るく、白っぽい自然が、今迄になく手馴れないので、パレットがすっかり変るような感じになるのには困ってしまった」とも述べていて、当地の風景が鍋井の表現に作用したことがうかがわれて興味深い。強い明暗のコントラストや荒めの筆触は、そうした苦心の末のものであろうか、この時期の鍋井の作品のなかでは珍しく厚手で力強い画面となっている。紀南地方を気に入った鍋井は、大阪から頻繁に当地を訪れるようになり、海岸や港の風景、梅林などを描いて、自身の代表作となるような作品に結実させていった。

(学芸員 三谷 渉)